

XI 第9の神のことば 「隣人について偽りの証言をしてはならない」

出エジプト 20:16

はじめに

第9の神のことばの中心的意味は法廷での偽証を戒めることであった。単に〈倫理的〉な嘘を禁じる規定ではない。出エジプト記 23 章 2 節にその具体例がある。「多数に従って悪の側に立ってはならない。」

「隣人について」と記されているように、隣人を不利に陥れるような偽証を立てることの禁止である。従って、〈社会倫理的〉な側面を第一義的に持っているのである。23 章 2 節に「多数に従って」とあるのは、多数決や数を頼んでの数の横暴を赦さないという公正を重んじる法の精神である。同時に続く 3 節に注目する。「また、訴訟において、弱い者を特に重んじてはいけない。」3000 年以上前の時代のことである。不当に弱者を優遇することも戒めているのだからなんと行き届いた配慮ではないだろうか。この場合「隣人」とは同じイスラエル共同体に住む人々のことである。しかも、イスラエルの民に加えられた寄留者に対する偽証も禁じられているというべきである。

1. 「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」とする交わり

この教えは、他人の悪評を流すいっさいの禁止、偽りの言葉を口にすることの禁止を含んでいる。しかし、私どもの社会では見るも無残に無視され、破壊されている現状である。この世の常識として「嘘も方便」と言い、仕事や世間の付き合いの都合で、だまし、だまされ、それが普通であるとの感覚が蔓延しているのではないだろうか。

聖書の真理よりも、人間的事なかれ主義が幅を利かせている教会の交わりは危険である。神の言葉が軽んじられている単なる仲良しグループの教会は要注意である。

そのような状態であれば、教会の戒規は執行されないであろう。教会は教会員に戒規を執行する責務を主から担わされている。信仰の誓約に反することをした場合、戒告・陪餐停止・除名などの罰則を含んでいる。教会がこの戒規を果敢に行わなければたちまち教会内に腐敗が蔓延してしまう。いつの間にか教会に、この世にも見られないような醜い現象が起きてしまう。使徒パウロは、問題多きコリントの教会に次のことばを書き送った。

「-----あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは神がおさばきになります。『あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい』」(1 コリント 5 : 11~13)。

主イエスはマタイの福音書 5 : 37 で第9の戒めの意味を拡張して教えておられる。「あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。」

真理や信義を重んじることは、人と人との関係で誠実・忠実を表す隠し立てのないことである。この第9の神のことばが求めているのはこの真実さである。それが、主にある聖徒の交わりである。そのような真実な教会の交わりでありたい。

2. 他人の名誉を尊重する

この第9の戒めは他人の名誉を守ることを求めている。

ハイデルベルク信仰問答 問 112 「第9戒では、何が求められていますか。」

答 「わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷をするものにならず、誰かを調べもせずに軽率に断罪するようなことに手を貸さないこと。かえって、あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の栄誉と威信とをわたしの力の限り守り促進する、ということです。」

子どもの世界でも、「ウザイ」とか「死ね」とか心無い言葉が純真な心に傷を負わせ、時に死に至らしめるいじめの根源は、この第9の神のことばを無視した結果である。十戒はそのような危険から神の民を遠ざけるために与えられたものであることを今更のように思い起こさせる。

神なき社会の中でこのような根も葉もないうわさや中傷が、メディアによって増幅され、拡散され深刻な事態を引き起こしその被害者の名誉と尊厳を失わせていることは、悲しいけれど今や日常となってしまった。主イエスが語られた世の終わりのしるしの一つであると思われる。「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます」(マタイ 24:12)。

しかし、神なき一般社会に限らず教会の中で争いや分裂が起こることの原因も、真実でないことが誇張され、お互いの間に不信感と猜疑心が生じ、そこから亀裂が起こることに端を発していることがあるのではないかと推し量られ心が痛む。

3. 偽りを捨て真実を語る

エペソ人への手紙 4章 23～25節のみことばに目を留める。

「また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。」

23～24節のみことばによって、後半の偽りを捨て真実を語る力が与えられるのである。主イエス・キリストの十字架の贖いによって救い出され、新しい人を着せられ、キリストのからだの一部分となり、神の恵みの契約によって自由とされているゆえに神を愛し、隣人を愛して生きる者へと召された。それ故に、同じ4章15節の奨めを与えられている。「愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」「愛をもって」真理を語ることを強調するのは、愛の伴わない真理のことばがあるからで、その愛のない真理は相手に伝わることも生かすこともなく、自分の正義感によって相手を断罪する結果に終わってしまう。しかし、この使命を果たすことは極めて困難である。使徒ヤコブの手紙3章はこの事柄の重要性和難関性を指摘している。

使徒ヤコブは主の兄弟であり、エルサレム教会の中心的重鎮であった。そのヤコブの言

葉である。「教師になってはいけない。厳しい裁きを受ける」からであると。

50年以上、神の言葉を語る務めをゆだねられて生きてきたが、思わずこのみことばのまえに立ちすくんでしまう私である。悔い改めて、主の憐みを待ち望む他何もできない。しかし、ゆだねられた務めのゆえに、みことばに縋りついて、御霊により頼んで召された召しを最後まで全うしたいと切に願う。

むすび

最後に、この第9戒を適応することにおいて正しく用いる知恵が求められることを共に考えたい。偽りを口にしないという自らの真実さを貫くあまり、隣人の心を痛めることもあるからである。たとえば出エジプト記1章19節の場合である。「助産婦たちはファラオに答えた。『へブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。』」

ファラオの幼児殺害命令にエジプト人の助産婦たちが抵抗し、虚偽の報告をしたのであるが、神はそれを許容したのであった。エジプトの助産婦たちは、この世の王よりも神の国の王を恐れたのである。専制者よりも命がけで神に従う道を選んだ。ファラオの厳しい詰問に対する助産婦たちの答は、部分的に真実であったのであるが、拡大して語ったのである。その結果は21節、次のように記されている。「助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。」

アウグスティヌスはこの個所について語っている。「神が彼女たちを祝福したのは、彼女たちが偽りを述べたことによるのではなく、神の民にあわれみを与えたからであり、彼女たちの虚偽によるのではなく、彼女たちの親切（もっと正しくは神への畏れ）と慈悲によるのであり、うそを巧みに使ったよこしまさによるのではなく、彼女たちがなした善によるのである。神は彼女たちの罪をお赦しになった。」大いに参考にしたい。

現在多くある課題、医者が患者に癌の告知をすべきかどうかの判断に、この戒めを不用意に適用してはならないということも知恵を求められる一つの参考例である。

